

date: 年 月 日

国語学習プリント

学習内容:

人質 フリードリヒ・フォン・シラー

氏名

年 組 番



「人質」 譚詩 フリードリヒ・フォン・シラー
小栗孝則訳

暴君ディオニスのところに

メロスは短剣をふところにして忍びよつた

警吏は彼を捕縛した

「この短剣でなにをするつもりか？ 言へ！」

險惡な顔をして暴君は問ひつめた

「町を暴君の手から救ふのだ！」

「磔になつてから後悔するな」

「私は」と彼は言つた「死ぬ覚悟である

命乞ひなぞは決してしない

ただ情けをかけたつもりなら

三日間の日限をあたへてほしい

妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ

その代り友達を人質として置いてをこう

私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」

それを聞きながら王は殘虐な氣持で北叟

笑んだ

そして少しのあひだ考へてから言つた

「よし、三日間の日限をおまへにやらう

しかし猶予はきつちりそれ限りだぞ

おまへがわしのところに取り戻しに來ても

彼は身代りとなつて死なねばならぬ

その代り、おまへの罰はゆるしてやらう」

さつそくに彼は友達を訪ねた。「じつは王が

私の所業を憎んで

磔の刑に処すといふのだ

しかし私に三日間の日限をくれた

妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ

君は王のところに人質となつてゐてくれ

私が繩をほどきに歸つてくるまで」

無言のままで友を親友は抱きしめた

そして暴君の手から引き取つた

その場から彼はすぐに出發した

そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうち

に

急いで妹を夫といつしよにした彼は

氣もそぞろに歸路をいそいだ

日限のきれるのを怖れて

途中で雨になつた、いつやむともない豪雨に

山の水源地は氾濫し

小川も河も水かさを増し

やうやく河岸にたどりついたときは

急流に橋は浚はれ

轟々とひびきをあげる激浪が

メリメリと橋桁を跳ねとばしてゐた

彼は茫然と、立ちすくんだ

あちこちと眺めまはし

また聲をかぎりに呼びたててみたが

繫舟は残らず浚はれて影なく

目ざす對岸に運んでくれる

渡守りの姿もどこにもない

流れは荒々しく海のやうになつた

彼は河岸にうづくまり、泣きながら

ゼウスに手をあげて哀願した

「ああ、鎮めたまへ、荒れくるる流れを！」

時は刻々に過ぎてゆきます、太陽もすでに

眞晝時です、あれが沈んでしまつたら

町に歸ることが出来なかつたら

友達は私のために死ぬのです」

急流はますます激しさを増すばかり

波は波を捲き、煽りたて

時は刻一刻と消えていつた

彼は焦燥にかられた、つひに憤然と勇氣を

ふるひ

咆え狂ふ波間に身を躍らせ

満身の力を腕にかけて流れを掻きわけた

神もつひに憐愍を垂れた

やがて岸に這ひあがるや、すぐにまた先きを

急いだ

助けをかけた神に感謝しながら

しばらく行くと突然、森の暗がりから

一隊の強盜が躍り出た

行手に立ちふさがり、一撃のもとに打ち殺

そうといどみかかつた

飛鳥のやうに彼は飛びのき

打ちかかる弓なりの棍棒を避けた

「何をするのだ？」驚いた彼は蒼くなつて叫

んだ

「私は命の外にはなにも無い

それも王にくれてやるものだ！」

いきなり彼は近くの間から棍棒を奪ひ

「不憫だが、友達のためだ！」

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容:

人質 フリードリヒ・フォン・シラー

氏名

年 組 番



と猛然一撃のうち三人の者を彼は仆した、後の者は逃げ去ったやがて太陽が灼熱の光りを投げかけたつひに激しい疲労から彼はぐつたりと膝を折った「おお、慈悲深く私を強盗の手からさきには急流から神聖な地上に救はれたものよ今、ここまできて、疲れきつて動けなくなることは愛する友は私のために死なねばならぬのか?」ふと耳に、潺潺と銀の音色のながれるのが聞こえたすぐ近くに、さらさらと水音がしてゐるじつと聲を呑んで、耳をすました近くの岩の裂目から滾々とささやくやうに冷々とした清水が湧き出てゐる飛びつくやうに彼は身をかがめたそして焼けつくからだに元氣をとりもどした

太陽は緑の枝をすかしてかがやき映える草原の上に巨人のやうな木影をゑがいてゐる二人の人が術をゆくのを彼は見た(術道)急ぎ足に追ひぬこうとしたとき二人の會話が耳にはいつた「いまごろは彼が磔にかかつてゐるよ」胸締めつけられる想ひに、宙を飛んで彼は

急いだ彼を息苦しい焦燥がせきたてたすでに夕映の光りは遠いシラスの塔樓のあたりをつつんでゐるすると向ふからフィロストラトスがやつてきた家の留守をしてゐた忠僕は主人をみとめて愕然とした「お戻りください! もうお友達をお助けになることは出来ませんいまはご自分のお命が大切です!」ちようど今、あの方が死刑になるところです時間いつはいまでお歸りになるのを今か今かとお待ちになつてゐました暴君の嘲笑もあの方の強い信念を變へることは出来ませんでした「どうしても間に合はず、彼のために救ひ手となることが出来なかつたら私も彼と一緒に死のういくら粗暴なタイラントでも(タイラント=暴君・専制君主)友が友に對する義務を破つたことを、まさか褒めまい彼は犠牲者を二つ、屠ればよいのだ(屠る=切り裂く・殺す)愛と誠の力を知るがよいのだ!」

まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いたすでに磔の柱が高々と立つのを彼は見た周囲に群衆が撫然として立つてゐた繩にかけられて友達は釣りあげられてゆく猛然と、彼は密集する人ごみをきわけた「私だ、刑吏!」と彼は叫んだ「殺されるのは!」彼を人質とした私は「こた!」がやがやと群衆は動揺した二人の者はかく抱き合つて悲喜こもごもの氣持で泣いたそれを見て、ともに泣かぬ人はなかつたすぐに王の耳にこの美談は傳へられた王は人間らしい感動を覺えて早速に二人を玉座の前に呼びよせたしばらくはまぢまぢと二人の者を見つめてゐたがやがて王は口を開いた。「おまへらの望みは叶つたぞおまへらはわしの心に勝つたのだ信實とは決して空虚な妄想ではなかつたどうかわしをも仲間に入れてくれまいかどうかわしの願ひを聞き入れておまへらの仲間の一人にしてほしい!」

※ふりがなは現代仮名づかいでふってあります